

つどい

第 443 号
2025.9.1発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

記録されなかった古代の大開発

― 狭山池・古市大溝・丹比大溝・河合大溝 ―

『古代史の海』編集代表 上遠野 浩一

はじめに

七世紀前葉の推古の時代は、古代の開発史における最大の画期である。『日本書紀』(1) (以下『紀』) 推古一五年(六〇七)と二二年(六一三)の二度にわたって、畿内各所で池溝開発と屯倉の設定が行われたことが記されている(ただし発掘調査で確かめられたものはほとんどない)。一方、同じ時期、七世紀初頭に狭山池の築堤が行われ、樋管が埋設されたことが発掘調査によって確かめられているが、どういうわけか、狭山池の大規模な築堤は『紀』には記されていない。

い。狭山池だけではなくこの時期の南河内段丘上には、古市大溝・丹比大溝・河合大溝といった大規模な溝が掘られたことが発掘調査によって確認されている。これらすべてが水利施設かどうか、築造年代についても議論があるが、どれも舟運説が出るほど大規模であり、硬い段丘層を何メートルも掘り抜いた大工事かつ難工事であったことは容易に想像ができるが、これらは記録には一切残っていない。

推古一五年と二二年に記録された開発は、『紀』という正史に記されているので

記録されなかった古代の大開発

― 狭山池・古代大溝・丹比大溝・河合大溝 ―

上遠野 浩一

あるから、王権による開発とみてよいであろう。ならば、記録されなかった狭山池や古市大溝といった大規模開発はどう考えればよいであろうか。従来、これだけ大規模な池溝開発であるから、これらは王権によるものと考えられてきた(2)が、これらが正史にみえない理由はあまり言及されてこなかった。もちろん、『紀』がいちいちの開発記事すべてを記録したわけではない、あるいは記録から落ちたということも考えられるが、狭山池は南河内の段丘地開発の嚆矢であり、あれほどの大規模でよく考えられたシステムが、王権の手によって成されたのであるならば、それを正史が書き漏らすことはあり得るだろうか。

以上の問題意識から、本稿では、狭山池・古市大溝・丹比大溝・河合大溝等の大規模